

---

# 月の唄

都築遊馬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の唄

### 【Nコード】

N0657R

### 【作者名】

都築遊馬

### 【あらすじ】

派手で目立つ兄弟に挟まれた自他共に認める地味な少女・朔夜。のらりくらりと平凡な生活を送っていたが、学院祭前にとある人物のせいで注目を浴びること！？ これは誰にも知られなくなかったのに……

## 登場人物紹介（前書き）

一応初（？）投稿です！

生温かい目で見ていただけたら・・・（笑）

## 登場人物紹介

### ～人物紹介～

浅見弥生 あさみやよい (16)

西鶯学院普通科四年生。派手で目立つ兄弟に挟まれた地味な少女。合気道を習っている。

感情表現が苦手で常に無表情。他人の感情の機微に敏感。浅見家に養子として入った。

浅見春人 あさみはるひと (19)

朔夜の兄。

中学で有名な文学賞に受賞し、現在人気小説家。

唯一朔夜と普通に接するが、ある日を境にあまり家にいることが少なくなった。

浅見透 あさみとおる (15)

双子の兄。

西鶯学院スポーツ科三年生。バスケット部でエースとして活躍している。

幼い頃、父に言われたことを信じて遠ざけたことを気にしているため、朔夜に対して無愛想な態度をとる。

浅見夏紀 あさみなつき (15)

双子の妹。

西鶯学院芸能科三年生。街でスカウトされ雑誌の人気モデルとして活動している。

彼女もまた父親にあることを言われ、それ以来朔夜を毛嫌いしている。

浅見千尋 あさみちひろ (35)

浅見兄弟の母。朔夜の母・橘漣の友人。  
世界的に有名なヴァイオリニストで、海外公演などでほとんど家に帰ってこない。

浅見崇 あさみたかし (38)

浅見兄弟の父。  
現在は離婚し子供たちとは別の住居に住んでおり、一切の関わりがない。双子が朔夜を毛嫌いする原因を作った。

相馬昂 そうますはる (18)

西鸞学院普通科六年生。生徒会長。  
朔夜の数少ない友人で、春人の元恋人。

和泉伽凜 いずみかりん (16)

西鸞学院芸能科四年生。人気実力派女優。  
朔夜の唯一の同い年の友人。

一条優 いちじょうゆう (23)

多くの人気歌手の作詞作曲を手がけるピアニスト。  
ひねくれた性格のため誤解を受けやすい。

## 登場人物紹介（後書き）

次からが本文となります。

拙い文章ですがよろしくお願ひします・・・！

勝手ながら主人公の名前を変更しました。

## プロローグ（前書き）

少々短めになってしまいました。

## プロローグ

六月下旬。

西鶯学院さいおうでは一学期の期末テストも終わり、生徒たちは間近に迫りつつある長期休暇に心浮き立たせていた。

西鶯学院は、文学科・スポーツ科・芸能科・音楽科・普通科の五つの学科を持つ中高一貫校である。多くの成功者を輩出し、今は次世代の才能の発掘と育成に力を入れている。

その学院では今、世間にもそれなりに名の知れた兄弟がいる。

学院の生徒は彼らを『浅見兄弟』と、尊敬と羨望の念を込めて呼んでいる。

とはいっても、そのうちの一人　長兄・浅見春人あさみはるとは昨年学院の文学科を卒業し、現在は天才小説家の名を馳せてテレビにも出ている。

その四つ下の双子の兄妹　浅見透あさみとおると浅見夏紀あさみなつきは、スポーツ科と芸能科の三年だ。透はバスケットで自身の運動能力の高さを示し期待のエースとなり、夏紀は街でスカウトされた雑誌のモデルとなり人気を博している。

この三人に共通することは唯一つ、世界的に有名なヴァイオリニスト・浅見万理あさみまりの美貌を精確に受け継いだ、日本人離れした整った顔立ちをしているという点だ。

それ以外の性格、趣味、価値観はまったく違っていいほど違う。

けれど、何事にも異分子と呼ばれるものは存在する。

もちろん、浅見兄弟も例外ではない。

彼らにとつての異分子とは、何一つ目立つ要素を持たない浅見家の長女・浅見弥生だ。

弥生は普通科四年で、黒のフレームの眼鏡をかけ長い髪を一つに括っているだけのどこにでもいる少女だ。

学院の中で彼女が浅見兄弟の一人であると認識している生徒は片手で足りるほどしかない。

弥生自身も目立ちたくないという考えで、学院内では極力気配を消して過ごしているという徹底ぶりだ。

けれど、何故弥生がそこまでして自分を平凡に見せようとするのか、その理由を知る者は誰一人としていない。

## 第一話 presto

昼休み、弥生は図書室に居た。

以前見つけた面白そうな本を手にとつていつもの席に座る。

この図書室は、蔵書数は眼を瞪るほどあるというのに、ほとんど生徒に使われないうちに残念な場所である。政治、経済、文学、エッセイ……。幅広いジャンルで豊富な種類の本が所狭しと並べたある景色はいつそ感嘆するほどだ。入学してから卒業するまで毎日通つても読み切れないだろう。

弥生が今読んでいるのは推理小説の本だ。

このジャンルの本は自分でも犯人を推理したりと頭を使うのでたまにしか読まないが、暇つぶしにはもつてこいの本だ。

「弥生、こんなところに居たのね」

「ん……。ああ、伽凜。どうかしたの？」

読むのを止めて顔を上げれば、芸能科の伽凜が目の前に立っていた。

「どうかしたの、じゃないわよ。今の校内は弥生の噂で持ちきりなのに……。その様子じゃ何も知らなさそうね」

「……。知らないって何が？」

伽凜の言っている意味が分からず首を傾げると、彼女は大げさに溜息を吐いてみせた。

「弥生……。今、音楽科に一条優ってというピアニストが来てるのは知ってるわよね」

「それはまあ……。でも、普通科の私には関係ないことでしょう？」

学科同士の接点などほとんど無いに等しいのに、何故その名前が出てくるというのだ。

「それがあるのよ」

「・・・は？」

伽凜の言葉に弥生は間の抜けた声を出す。とはいっても、顔は無表情なのだから端から見ればさして驚いていないように見えるだろう。

けれど、長い付き合いの伽凜には弥生が十分に驚いているのが分かる。無表情に見える顔も微かにだが眉間に皺が寄っている。

「一条さんがね、今度の学園祭のコンクールで自分の伴奏で生徒に歌ってもらうのを了承したらしいのよ」

その言葉で頭の中に一つの答えが導き出される。だが、それは弥生にとって認めたくないものだった。

「で、条件として相手は一条さんが選ぶっていうことで話はずいたんだけど」

「・・・その先は聞きたくない」

無理やり話を切って頭を抱える。パニックになってもおかしくない状況なのに、冴え渡っている自分の頭が恨めしい。

「その一条さんが後日　　というか今日の朝、先生たちに相手の生徒の名前を言ったらしいの」

伽凜は弥生の言葉を無視してなおも話を続ける。

「でも、その名前の生徒は音楽科にはいないの。音楽科の先生たちは頭を傾げてただけど、その話を聞いた学園長がああ『浅見兄弟』の一人だろうつて言っちゃったのよ」

その言葉に一気に学園長に対しての殺意のような感情がふつつつと湧き上がってくる。

あの学園長・・・。自分が暇だからって人を暇つぶしの材料に使いやがって・・・!!

暇が大嫌いな学園長は校内でも有名で、たまに生徒を使って暇つぶしをしているという話はよく聞く。

「で、夏紀ちゃんのところへ聞きにわざわざ先生が行ったのよ。それで騒ぎが生徒に洩れて、あなたの正体が表に出てきましたって話……大丈夫？」

「……これが大丈夫に見えるとも？」

机に突っ伏して頭を抱えている様子は確かに大丈夫とは言い難いだろう。

「というか、何で私なの？声楽やってる子の方がよっぽど良いと思うけど」

「さあ？それはご本人に聞いてちょうだい」

そう伽凜が言った途端、図書室の扉が勢いよく開かれる。

入ってきた人物はきよろきよろと辺りを見回している。当然

ではないはず　だが、弥生がいつも座る場所は入り口からは絶対に見えない。

「……悪い、伽凜。私帰るね。あの人には入れ違いって言うこと」

そう言うのが早いか、弥生は学生靴　もともと早退で帰ることになっていたので持っていた　を持って本を元の位置に直すと本棚の影に隠れながら出口を目指す。幸い、扉は開け放たれたままなので音を立てることなく脱出に成功した。

図書室を脱出したあと、弥生はそのまま昇降口へ歩いていった。

靴を脱ぎ換えて外へ出るが、正門のほうへは行かなかつた。

生徒は基本的に正門から出入りをする。早退届は前以って提出していたため、教室に行ったであろう教師は弥生が居ないことに気付いて、正門を見張っているかもしれない。逆に、裏門は校舎とは少し離れた場所にあつて教師もあまり見にこない。

周りに教師が居ないかを確認しながら足早に裏門を目指すのは些か疲れる。けれど、あと少しで裏門が見えるはずだ。そう考えると

足も軽くなる。

門まであと数メートル、といった距離まで来ていた。だが。

「今だ！」

普通科の男性教師の掛け声と共に一斉に教師たち　今の今まで草むらに隠れていたのか、服や髪に葉っぱがついている　が飛び出してきた。

「・・・は？」

随分と間抜けな声だったと自分でも思ったが、時既に遅し。教師たちに押さえ込まれてしまった。

「今正門のほうにいる先生たちにも連絡しました」

今年入ったばかりの、音楽科の女性教師が壮年を迎えた頃の男性教師へ報告する。

「いやあ、やはり相馬の読みは当たりますね」

相馬、の名前に弥生がぴくりと反応するが、教師たちはそれに気付かない。

「常日頃から、生徒たちをよく見ている証拠でしょう」

彼女がいれば安心ですね、と弥生を捕まえている教師と呑気に言葉を交わしている。

相馬といえば、この学院には数人いるが教師の口にする名前の持ち主は一人しかいない。相馬昂　現生徒会長で、弥生の友人だ。

おそらく、彼女は教師たちに乞われ、正直に情報を与えただけだろう。だがしかし、友人に売られたと思ってしまうのは弥生だけなのか。

言いたいことはいろいろあるが、ここはひとまず抑えるべきだろう。ここで教師からの印象をぶち壊すような真似はしたくない。

「……ああ、浅見。相馬からこれを渡すよう頼まれたんだが」  
教師をパシリに使うとは……。

相も変わらずな友人の人使いの荒さに嘆息しながら、小さく折りたたまれた紙切れを受け取り、素早く眼を通す。

書いてあったのはたった一言だった。

『見苦しいわよ。』

弥生は紙切れを片手でぐしゃりと握りつぶす。

その様子を見ていた教師たちは息を呑んで思わず後ろに下がってしまった。

大きく溜息を吐いたかと思うと、不機嫌オーラ丸出しで教師たちのほうに振り向いた。

「……どうぞ、連れて行ってください」

怒りなど微塵にも感じさせないほど静かに発せられた声は、かえって不気味な怒りを思わせた。

「あ、ああ……」

教師たちはその言葉にはっとして、弥生を連れ立って校舎の中に消えていった。

第一話 presto (後書き)

昴は結構いい性格をしてる子です。

出来れば敵に回したくないかも・・・(笑)

読んでくださってありがとうございます。

## 第二話 Moderato (前書き)

サブタイトルのネタが尽きたので一話、二話の形式でいきます・・・  
(汗)

書かれている音楽用語とあまり関連はない気がします　それってどうよ!?

## 第二話 moderato

教師に連れられて 任意という名の強制連行だった 向かった先は、学院長室だった。

「失礼します。浅見を連れてきました」

「どうぞ」

中から学院長の返事が返ってきて、そのまま中へ通される。部屋の中には音楽科の教師が学年を問わず揃っており、弥生が現れた瞬間険の宿った眼で睨む。

「浅見弥生さんだね。まあ、ここに座りなさい」

学院長に促されて座った席の正面に教師ではない男性が一人座っていた。

「……」

どこかで会った気がするが思い出せない。

思い出そうと思ふの淵に嵌まりかけた弥生に学院長が声をかける。

「さて、今日君をここへ呼んだ理由は知っているかね」

「……はい。友人が教えてくれたので」

教えてくれたというよりも一方的に話してきただけだが。

「そうか。実は我々も今回のことには困っているのだよ」

実にうそ臭い『困った』演技をする学院長を冷めた目で一瞥しながら、続きの言葉を待つ。

「音楽科の出し物に普通科の生徒が混じるとなると他からの批判も大きいが、一条さんが君じゃないとこの話を流すと言ってこられてね」

「はあ……」

「それで、我々だけでは決められないと思つて君を呼んだんだが……今日はどこか行く予定だったのかな」

好々爺然とした笑みを浮かべる学院長の視線から逃れようと正面に座る男性 一条優氏だ を見る。

すらりとした長身で有に180センチはありそうだ。ピアノを弾くためだろう、整えられた爪で指も相当な　一般的なものと比べて　長さだ。

だが何よりも人目を惹きつけるのは、その顔と雰囲気だろう。顔は間違いなく他の兄弟たちと同じ分類だが、その雰囲気は正反対で寡黙な鋭さを秘めているようだ。

「もちろん君の意見は優先させてもらおうよ。こちらの事情に巻き込まれただけなのだからね」

無言で観察をしてもまだ学院長の話は続いている。

弥生は見えないように小さく溜息を吐いて、学院長を見上げる。

「では言わせていただきます。・・・この話を引き受けるつもりは全くありません」

否定の言葉を発した瞬間、一条氏が微かに揺れた気がした。周りに立っている音楽科の教師たちは当たり前前の反応だと言わんばかりにしたり顔になっている。

それを横目で流し見ながら話を続ける。

「今回の話は音楽科で持ち上がった話なのでしょう。そこに普通科の生徒を連れてくるのはおかしな話です。それに、専門的な教育を受けたこともない私が舞台に立ったところでとても皆さまを納得させられるものは出来ないと思います」

そうだ。私なんかよりずっと素晴らしい歌声の人は他にたくさんいるのだから。

というより何で私なんかをこの人は指名してきたんだろう。会ったことある気がするけど思い出せないし、むしろ人前で歌声を披露した覚えはない。

「学院長。彼女もこう言っているのですから最初に出した案のおり、最高学年の萩原に歌わせるべきでしょう」

「けれどね、石田君。一ヶ月もかけて音楽科の生徒全員を見て回って出された答えがこれなんだ。そこを君はどう捉えるつもりだい」

「それは・・・」

学院長の言葉にうなだれる。

他の教師たちも同じようなことを考えていたのか、全員下を向いて何も喋らない。

「一条さん、私を指名した理由をお聞きしたいのですが」

先ほどから思っていた疑問を目の前に座る人物にぶつける。

それまで一言も喋らなかつた一条氏は、おもむろに口を開く。

「・・・・・・・・子守唄が聞こえたから」

「は・・・・・・・・？」

子守唄？

何故ここで子守唄になるわけ？そんなの師範のときの双子のお昼寝に歌うくらいなのに。

ん・・・・・・・・師範の家？

「思い出した！・・・以前、師範の家に訪ねてきた」

「そうだ」

二週間ほど前、弥生は合気道を教わっている師範の家でその孫娘の双子の相手をしていた。ちょうどそのとき、来客がいてお茶の用意をしたりして相手の顔を見ている。もちろん、その来客も弥生の顔を見てるだろう。

お昼寝の時間になっても遊び足りないと不満を言う双子を寝かしつけるために子守唄を歌ったのだ。だがそこまで大きな声で歌って

ない。たとえば、お昼寝の部屋と来客室が結構近かったとしても……。

「あのとどこからか子守唄が聞こえてきた。相馬氏に聞けばさつきお茶を出してくれた子だと言われたから、文化祭ではお前に歌って欲しいと思ったんだ。俺はお前以外の生徒とは演奏しない」

はつきりと告げる口調には一切の迷いがなく、真正面から弥生を見つめる。

「たとえそうだとしてもお断りさせていただきます」

「何故だ」

一条氏の顔が険しくなる。それを認めながらも弥生はあえて表情を変えずに話す。

「私は人前で歌うことを望んでいません。ですので、諦めてください」

「……断る」

「……はい？」

ここで了承してくれるかと思いきや、一条氏は憤然とした様子で立ち上がった。

「俺はお前以外は認めない。お前が出るつもりがないのなら、その気にさせるまでだ」

「なっ……一体どうしたらそんな発想になるんですか!？」

弥生はそこで初めて声を荒げた。

これには周りの教師たちも驚いたように弥生を見ている。

「お前があらかじめ断るからだ。こうなった以上、俺は俺の持つ権力を使ってもお前を引きずり出してやる」

そう言い放つと、一条氏は呆気にとられる周りを無視して出て行く。

「あー……大丈夫かね？」

まだ少し現実に戻れていない学院長の言葉に弥生はキッと振り返

った。

「大丈夫じゃないに決まってるでしょう！」

もう話すことはないなので失礼します！と怒りを隠すことなく乱暴な手つきで出て行った弥生を遺された人々は呆然と見送った。

次の日、学院中に浅見弥生がコンサートに出ることを了承したという噂が広まった。

## 第二話 moderator (後書き)

以外に話が長くなった・・・orz

一条さんはひねくれた性格の方なので真っ正直に言葉を受け取ってくれません。

(作者が言うのもなんですが、めんどい人だ)

読んでくださってありがとうございます。

また、お気に入り登録ありがとうございます！

第三話 r i s o l u t o (前書き)

少し長くなってしまいました。

文章の切り方が苦手ってどうなんだろうな・・・。

### 第三話 r i s o l u t o

一条氏の衝撃発言から三日が経った。あれ以来、クラスメイトはおろか学院中の生徒から遠巻きに見られている。

「弥生……大丈夫じゃなさそうね……」

「……」

最早声を出すことすら億劫だと言いたげに、弥生は教室へ入ってきた伽凜に目を向けた。

「それはそうと、お昼を食べに行きましょう。昴さんは先に行くって言ってたから」

「……分かった」

教室にいても嫌な空気のままなので伽凜の言葉に素直に従う。

弁当箱を持って屋上に繋がる階段を上っていく。一応使用禁止にはなっていないが、滅多に使う生徒はいないため、半ば三人の独擅場と化している。

屋上の扉を開けばそこにはすでに昴が来ており、なにやら難しい顔をして考え事をしている。

「昴さん？どうかしたんですか、難しい顔して……」

「……ああ。来たのね、二人とも。ちょっと大事な話があるから鍵は閉めて」

そう言われて扉の鍵を閉める。

扉が設置されている壁に背を預けて、持ってきた弁当を広げる。

「それで……大事な話って何ですか？」

「……」

「昴……？」

なかなか話し始めない昴の様子を怪訝そうに見る。普段、昴はどんなことでも話すべきと判断したものは一切遠慮無しに話す。

「・・・弥生」

意を決したように昴が朔夜を正面から見据える。それに応えるように見つめ返す弥生は頭の隅で何を聞かれるか何となく分かっているような気がした。

「コンクールに出る気はある？」

「ない」

弥生は昴の問いに即答する。その答えに二人が驚くことも反対することも無いのはその理由を知っているからだ。

誰にも言えない過去の秘密　。

「・・・そう。なら、学院長には私から言っておくわ。音楽科の教師たちは萩原とかいう生徒を出したらしいからおそらくこの話は立ち消えになると思うわ」

「萩原・・・？」

先日の話にもその名前は出てきた。ちゃんと候補がいるのならそつちで決めて欲しいものだ。

「ええ。でも、今はスランプに陥ってるらしいからどうなるかしら最早どうでもいいのか、昴はさして心配そうには見えない様子で言っている。」

その後は、三人で昼休みを屋上で過ごしてそれぞれ教室へ帰っていく。

「・・・浅見弥生さんね。話があるのだけどいいかしら？」

放課後、教室を出たところで音楽科の制服を着た生徒に捕まった。学年章を見れば高等部三年の付けているものだった。

まだ教室に残っていた生徒が何事かとこちらを凝視している。

「構いません」

「ありがとう。．．．ここでは話しくいから場所を変えましょう」  
彼女も周りの噂を知っているのだろう。後ろの野次馬たちを一瞥して歩き出す。

音楽科の練習棟まで来ると、そのうちの一つに彼女は迷わず入っていく。

「今の時間は私がこの部屋を借りているから誰も入ってこないわ。．．．．何故私が貴方を呼んだか分かる？」

「予想は出来ません。．．萩原先輩」

「そう。名前も知ってるのね。なら自己紹介はいらないかしら」

そう言っただけで彼女　萩原美琴はピアノ椅子に座って力なく微笑んだ。

「一条さんが私を指名する前は先輩が歌うはずだったとお聞きしましたが」

「そう先生たちが言ってるだけよ。私自身は一条さんと共演するなんて出来ない。．．．」

「スランプだからですか？」

「そう。．．．．今の私じゃ皆が満足するような歌を歌えない。

だから、私は選ばれないことには納得しているわ」

選ばれないことには、というとは、弥生が選ばれたことには納得していないのだろう。

現に美琴は弥生を睨みつけるように見ている。けれど、その眼には覇気がなく涙さえ浮かんでいる。

「．．．私が選ばれたことには納得されていないと」

「当たり前でしょ！何で音楽科の生徒でもないあなたが選ばれるの！」

美琴はずつと溜まってきた怒りを弥生にぶつける。

「他の音楽科の生徒ならまだ我慢できるわ。でも、あなたを認めるなんて出来ない！」

「……私はコンクールに出るつもりは毛頭ありませんよ」「え……？」

弥生の突然の言葉に美琴は一瞬何を言っているのか分からなかった。

「な……何を言ってるの!？」

「私はコンクールに出るつもりはないんです。このことは相馬生徒会長を通じて学院長にも話がいっているはずですよ」

「あなた……何を言っているのか分かってるの!？自分が目立てる機会を潰すなんて……」

美琴は先ほどまでとは違い、弥生の言葉にうろたえ始めた。美琴は弥生が『浅見兄弟』の一人であることは知っているのだろう。総じて目立つ彼らの中にいて一人目立たない存在なのだ。表に出るチャンスをふいにする意味が分からないのだろう。

「私は目立ちたいと考えてはいません。……それに、他の兄弟たちとは血の繋がりもありませんし」

「血が繋がってないって……」

「養子で浅見家に入っただけなんです。私の母が義母　浅見千尋の友人だったので、その好意で引き取ってもらえたんです」

これは別に隠しているものではない。その気になれば誰でも知れる話だ。けれど、誰も進んでこの話をしないため、あまり人には知られていない。

「私自身は別に目立ちたいとは思いませんし、むしろ静かに過ごしたいんです。ですから、おそらくこの話は立ち消えになるでしょう」そこで話が途切れると、美琴は恥じるように俯いた。

相手の話も聞かずに自分の一方的な感情をぶつけてしまった。なのに彼女はそれを怒らずに冷静に話を進めている。

。これじゃあ、どちらが年上か分かったものじゃないわ・・・

「弥生さん、ごめんなさい。つい感情的になりすぎたわ。酷いことまで言って・・・」

「いえ、あれが普通でしょう。これで文句も言わずにすごすご引き下がるほうがよっぽどプライドのない人間に見えますよ」

弥生は全く気にしてない風に気さくに声をかける。その様子に美琴は思わず笑ってしまった。

「あなたって、見かけによらず強いよね」

「・・・そうですか？」

弥生は本当に分からないといった風に首を傾げる。

「・・・自覚なしっていうのも怖いわね」

美琴は思わず呟いてしまった。

美琴は自分のこの心境に変わりの速さに驚いていた。

先ほどまでは恨んでいたといっても過言ではないほど弥生に嫉妬していた。けれど、彼女と話していくうちにそんな言葉はどこかへ消えていた。

そう思うと、やはり、と納得してしまう。

彼女もまた周りの人を惹きつけて止まない『浅見兄弟』の一人なのだ。

### 第三話 r i s o l u t o (後書き)

引き続き萩原さんとの会話です。

そしてこの後、朔夜のコンクール問題が・・・！？

と、引き伸ばしてみたり(笑)

お気に入り登録ありがとうございます！！

第四話 V i v o (前書き)

久しぶりの投稿です・・・。

お待たせしてすみませんでした!!

## 第四話 vivo

「そういえば、どうして一条さんはあなたを選んだの？・・・こんな言い方するのは嫌だけど、歌声を披露する機会なんてないでしょ」

「あー。それは、まあ・・・」

美琴の質問に突然齒切れの悪い声を出して答えを言わない弥生の態度を少々不審に思う。

「弥生さん？」

「その、なんと言いますか・・・。私が通ってる道場の先生の家へ行ったときに、その家の双子の遊び相手をしてまして、丁度そのときに一条さんが師範の家を訪ねてこられました。・・・お昼寝の時間になっても寝付かない二人に子守唄を歌ってあげたんですね。」

かなりしどろもどろな説明になっているが要点は掴めた。

「要は、その双子に歌ってあげた子守唄を聞いて一条さんがあなたを選んだってことね」

「・・・そういうことになります」

「ふーん・・・」

美琴はしばらく考えるように腕を組んだ。そして、何か思いついたような顔をして弥生を見る。

「ねえ、それならあなたの歌を聞かせてくれない？」

「へ・・・？」

美琴の突然の願いに弥生は固まった。

「だって一条さんが認めるほどの歌声の持ち主なんでしょう。それはぜひ聞いておかないと！」

「いや、あの・・・お聞かせするほどのものでも・・・」

「なあに？一条さんは良くて私は駄目なの!？」

いや、良いも何も聞かせるつもりすらなかったんですけど・

。。。

「……分りました」

「ほんと!？」

「ただし……」

弥生は真顔で言葉を続けた。

「先輩も一緒に歌ってください」

「ええっ!?!?……でもっ、私は今スランプだし」

いきなりの条件に慌てふためく美琴にそれがどうしたと言わんばかりに大きく息を吐いた。

「素人が言うのもなんですが、自分が楽しまなきゃ相手が聞いても楽しくないんじゃないですか？」

「っ……」

「別に誰かに聞かせるために歌ってるんじゃないんですから、そんな技術的なこととか何も考えなくてもいいですよ」

「というかそんなもの言われても私には分かりませんし、と弥生が備え付けのコンポに入れるCDを選びながら言う。

「……楽しく、歌う」

美琴はその言葉を聞いてこれまでの自分が頭の中を通り過ぎてゆく。

周りから掛けられる期待に応えようと日々努力に励み、形振り構わずに歌い続けてきた。けれど、その中で”楽しかった”と思える時があっただろうか。

両親がどちらも有名な音楽家として名を馳せる中、その娘として過度な期待を持たれ、何度期待はずれだと嘆息されてきたか。あんな悔しい思いを二度としたくなかったから歌い続けた。いつか私を馬鹿にした彼らを見返すために。

「・・・あ、萩原先輩。これでいいですか？」

CDを選び終えて弥生が一枚のCDを持つてくる。

「take me home country roads・・・  
?」

「はい。一応これは歌詞を見なくても歌える曲なので」

『take me home country roads』とは有名どころを選んだものだ。

「そう。ならそれでいいわ」

美琴の了解を得ると、弥生はすぐにCDコンポにCDを入れる。

静かに流れ始めた曲に身を任せるようにして眼を閉じる。

『take me home country roads』はアメリカのポピュラー・ソングだ。多くの歌手によってカバーされており、日本でも某アニメ映画で使われていたくらいだ。

C o u n t r y R o a d s    t a k e   m e   h o m e   t o  
t h e   p l a c e   I   b e   l o n g

W e s t   V i r g i n i a   m o u n t a i n   m a m m a  
t a k e   m e   h o m e   C o u n t r y   R o a d s

弥生の歌声は初めは小さく、聞こえにくく感じた。けれど、そこに込められた思いがしっかりと形となって聞く人々の耳に届く。歌のタイトルと同じ、”故郷に帰りたい”という思いが。

A l l   m o s t   h e a v e n   W e s t   V i r g i n i a  
b l u e   r i d g e   m o u n t a i n   s h e n a n d o a  
h   R i v e r

L i f e i s a l l t h e r e o l d e r t h a n  
t h e t r e e s  
y o u n g t h a n t h e m o u n t a i n s g r o w  
n ' l i k e a n b r e e z  
C o u n t r y R o a d s t a k e m e h o m e t o  
t h e p l a c e I b e l o n g  
W e s t V i r g i n i a m o u n t a i n m a m m a  
t a k e m e h o m e C o u n t r y R o a d s

弥生の歌はまるで英語圏の人が英語の歌を歌うように流暢で迷いが  
ない。普通の人でここまで歌い上げる人など早々いない。

歌が終わり、弥生がCDを止めに動く後ろ姿を見ながら美琴は呟  
いた。

「・・・・・・・・一条さんがあなたを選んだ理由が分かったわ」

途中から美琴は歌っていないかった。否、歌えなかった。

こんな鳥肌の立つような歌を聴かされて自分が舞台上立つなど出  
来るはずがない。それほどまでに弥生の歌は美琴の心を奮わせた。

それに弥生の歌声に似た声を美琴は知っていた。だが、それが誰  
なのか思い出せない。

「ありがとう、弥生さん」

「え・・・・・・・・」

突然礼を言われ、弥生は何のことかと訝る。

「おかげで何とかスランプから脱出できそうだわ。・・・私は歌を  
楽しむことを忘れていたから」

「・・・萩原先輩」

「音楽科の生徒にはあなたに何もしないようこちらで言うておくわ。ここは実力主義だから、上の人間の言うことは絶対なの」

「ありがとうございます」

弥生は素直にお礼を言った。少なくとも、これで危惧していたことの一つは解消されたと言ってもいいだろう。

「じゃあ・・・私はこれで失礼します」

「ええ。こちらこそごめんなさい。・・・ありがとうございます」

弥生は再び頭を下げてレッスン室を出た。

## 第五話 grave

弥生は誰もいない教室から鞆を取ると、急いで家に帰った。

家に帰っても明かりは点いておらず、誰もいないことに嘆息する。

相変わらず二人とも忙しいらしい。

透は県大会が近いと言っていたし、夏紀は秋物の撮影がもうすぐ始まると言っていた。それでなくとも二人からは避けられているのに、一体どうすればいいと言うのか。

弥生は家の中に入ると、いつものように自分の分だけご飯の用意をして食べる。他はラップをかけて置いておく。二人が帰ってきたときに自分たちで温められるようにだ。

弥生は自分の部屋に戻ってパソコンの電源を入れる。

”一条優”の名前で検索してヒットしたうちの一つを開く。

『一条優氏、西鶯学院でピアノ演奏!?!』

開いてすぐに大々的に書かれている文字に溜息を付きながら画面をスクロールする。

『7月9日、一条優氏が自身のブログにて以前よりオファーを受けていた西鶯学院の文化祭でピアノ演奏をすることを明かした。なお、当日は代表生徒の伴奏も務めるとのこと。年に一度しかコンサートを開かない一条氏のファンはこの文化祭に大勢訪れる模様。代表生徒の名前は』

思わず大きな音を立てて椅子から立ち上がった。

「何で……もう、広がって……」  
余りのことに弥生は呆然と呟くことしか出来なかった。

『 代表生徒の名前は、普通科四年 浅見弥生さん 』

弥生はこの間会ったときに言っていた一条さんの言葉を思い出した。

『 俺は俺の持つ権力を使ってでもお前を引きずり出してやる 』

何でこんなことをするの……？

翌日、弥生は学校についてすぐ学院長から呼ばれた。

「 いやあ、すまないね。まさか一条さんがあんな手を使ってくるとは思わなかったよ 」

「 ……学院側はこの話をどうするつもりですか 」  
そう。学院がこの話を否定すれば弥生は出なくてもいい。だが。

「 学院としてはこのまま君が代表として出る、ということにしたいと考えている 」  
「 ……! 」

予想してはいたが認めたくなかった言葉に弥生は息を詰める。  
学院にとって普通科の生徒が出るだけでも周りがうるさいのに、

これでさらに否定すればマスコミまで駆けつけてきそうな勢いだ。ここは、弥生が出ることで一応は丸く収まるのだろう。

「すまないが、出てくれないだろうか。君が領けば、私たちは全力で君を守ることを誓おう」

「……今日一日、考えさせてください」  
それ以外に言える言葉が見つからなかった。

教室に戻って一斉に周りの視線が向いてきた。だが、今はそれに反応することすら出来ない。

全てから目を背けるように机にうつ伏せる。

……何を考えればいいのかすら分からなくなった。

どうすればこの騒ぎが静まるのかも、これからどうすべきかも考えることが億劫に感じてきた。

「……浅見さん」

不意に上から声がかかってきた。面倒だと思いつつも顔を上げる。そこには、クラスの委員長と数人の女子が集まっていた。

「あなたが代表生徒になるって本当なの？」

「……まだ決まってるじゃない」

「でも、一条さんがあなたがそうだってブログに書いてたよ」

「あれはあの人が勝手に書いただけ。学院もさっき本人に抗議の電話を入れるって学院長が言った」

「……あなたは出ることに納得してるの？」

委員長のその質問に、何故か突然怒りが沸いてきた。

「だれが！……何で私が金と権力で相手を無理に従わせられることを納得しないといけないの！」

怒鳴り声は教室中に響き、全員が静かになった。

はっとして自分が何を言ってしまったのかを自覚して居心地が悪

くなる。

「っ……ごめん。一人にさせて」

椅子から立ち上がって教室を出ると、人気のない場所を探して歩き始めた。

教室に残された人たちは、呆然としてそれを見送った。

第五話 grave (後書き)

遅くなって、申し訳ありませんでしたー(泣)

これからどうしようかな、なんて考えてたらこんなに経ってました・

次からはなるべく早く更新できるようにしたいと思いますが、いろいろとやることが多いのでいつになるか分かりません。

こんな作者でよかったら、温かい目で見守ってください!! (泣)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0657r/>

---

月の唄

2011年7月2日19時07分発行